

演題 4. 解剖実習遺体の第五肋骨に見出された二分肋骨

○大澤 得二, 小野寺政雄, 馮 新顔
佐々木信英, 長門 里美, 松本 陽子
奈良 栄介, 藤村 朗, 野坂洋一郎

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座

平成13年度の岩手医科大学歯学部2年生の解剖実習遺体の中に2例の二分肋骨を見出した。二体の遺体には肋骨以外の形態的な異常は見い出されなかった。第1例の直接死因は敗血症, その他の所見は前立腺癌であり, 第2例の直接死因は脳硬塞であった。どちらの遺体においても疾患由来する二分肋骨であると考えすることはできなかった。

二分肋骨は第3, 第4肋骨に出現しやすいと言われているが, 今回の第1例は左側第5肋骨に出現したものであった。分岐は肋軟骨部で起こり, 上位(第4肋骨)の肋軟骨との癒合を示した。また第2例は左側第4肋骨に出現したものであり, 分岐と吻合は骨部において完結していた。どちらの例においても二分肋骨の二つの分枝の間隙は正常と思われる肋間筋で充たされていた。肋間神経は下位の分枝の下縁を走行し, 上位の分枝には分布していなかった。従ってこの変異は体節の増加がおきたためのものではなく, 胸骨との関節部分の変異としてとらえるべきものと思われる。

二分肋骨の発生率についてはサモワ人, 8.4%, 米国人, 2.2% (Martin et al. 1960) のように比較的多いものだとする報告と, 米国人0.013% (Steiner 1943), 0.0064% (Etter 1944) のように, きわめて稀なものとする報告があるが, 日本人において, 1.32%の報告があり(竹本ら, 1987), 非常に稀な破格ではないように思われる。

平成9年度の本学会に発表した3例では, いずれも骨軟骨移行部で二分していたが, 今回の2例ではそれぞれ軟骨部, 骨部で二分しており, 二分する位置は骨軟骨移行部に限らないことが明らかになった。

演題 5. 岩手県立中央病院歯科口腔外科における過去10年間の入院患者の臨床統計的観察

(1991-2000年)

○中崎 綾子, 松浦 政彦, 渋井 暁
中里 滋樹

岩手県立中央病院歯科口腔外科

平成3年1月から平成12年12月までの最近10年間に岩手県立中央病院歯科口腔外科に入院した症例の実態および動向を把握する目的で, 臨床統計的観察を行った。入院患者総数は867人で, 最近4年間で増加傾向を示し, 昨年の入院患者数は128名であった。入院患者男女比では, 男性48.8%, 女性51.2%と女性の割合がやや高く, 年代別では60才代が最も多く, 以下50才代, 40才代, 30才代の順であった。

手術症例では, 全身麻酔症例が49.7%, 局所麻酔症例が37.3%と全身麻酔がほぼ半数を占め, 最近5年間で増加傾向にあった。

疾患別では, 嚢胞(22.2%)が最も多く, 次いで炎症(16.3%), 歯・顎骨欠損症(11.9%), 腫瘍(11.3%), 外傷(8.4%), 埋伏歯(6.2%)と続いていた。また最近の傾向としては, 腫瘍や埋伏歯の一泊入院下の両側抜歯等の症例は増加する反面, インプラント手術の局麻下手術は入院対象外としたため, 入院下管理のインプラント手術は減少していた。

疾患別入院日数では, 悪性腫瘍の95.2日が最も長く, 以下外傷26.8日, 良性腫瘍18.6日, 炎症14.6日, 嚢胞13.6日, 埋伏歯8.6日, 歯・顎骨欠損症7.4日と続いていた。居住地別では, 盛岡市(37.0%)が最も多く, 次いで一関市(7.5%), 宮古市(6.1%), 岩手町(6.0%), 他県(4.9%), 滝沢村(3.9%)の順であった。

近年当病院は3020運動を展開し, 急性期型病院を目指している。すなわち紹介率30%以上, 入院患者の在院日数20日以内を目標に医療活動を展開している。当科もそれにならい, 近年紹介率は増加傾向を示していた。一方, 一泊入院下の両側埋伏歯抜歯やクリティカルパス導入による入院期間の短期化により, 在院日数も10日前後と以前よりかなり短縮されてきた事が最近の入院患者の傾向と思われた。